教科書について
「楽しく学べて、コミュニケーション力が付く教科書」を求めて
考えてみませんか？

皆さんはこれまで、どんな教科書に出会い、
どんな「付き合い方」をしてましたか。
長年、既存の教科書について疑問を持ちながら考え、
試行錯誤を重ねた現場の教師たちから『できる日本語』という
新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で
教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと
共有していきたいと思います。

第9回

21世紀の日本語教育は“対話”重視 2

初級から「固まりで話す」ことを大切にしよう！

対話教育という視点で今の日本語教育を考えると、「初級レベルにおける『固まりで話す』ことの軽視」を問題点として挙げることができます。「固まりで話す」というのは、幾つかの文からなる、ある長さをもった発話、を意味します。皆さんは普段「固まりで話す」ことをどれだけ意識して授業を行っているでしょうか。

まず、初級教科書を見てみましょう。

A：暑いですね。
B：そうですね。窓を開けましょうか。
A：はい、お願いします。

といった、二人の間でのやり取りが中心になっていることがわかります。しかも、長くてもせいぜい一人の発話が1文か2文程度で終わっています。こうしたやり取りを学ぶことも大切ですが、それと同時に、初級スタート時から、「固まりで話す」ことも重視したいものです。

もちろん、初級レベルの読解教材や書き教材には「固まりで書かかれた文」が出てきますが、残念ながら、話すことに関してはあまり多く見られません。

しかし、自分の考えや感じたことなどを伝える、伝え合うためには、ある長さをもった発話が求められます。そして、それが対話の基本にもなるのですが、往々にして「それは中級になってから」と、初級では忘れられがちです。初級では1文か2文程度のやり取りが中心、中級になると急に「段落で話せるようにしなければ！」と力を入れはじめるのが現状です。初級レベルから「固まりで話すこと」を意識し、対話力アップを目指した日本語教育を行っていきたいものです。

ここで、対話力アップを目指した初級教科書を、覗いてみることにします。

話読聞書

「私の国・町」

私はイタリアのフィレンツェから来ました。フィレンツェはイタリアの少し北です。フィレンツェはとてもにぎやかなところです。古い教会や美術館などがあります。教会はとてもきれいです。2月にチョコレートの祭りがあります。いろいろなチョコレートがあります。とてもおいしいです。フィレンツェは春、暖かいです。そして、雨が少ないです。フィレンツェはいいところです。皆さん、ぜひ来てください。

チョコレート　美術館　皆さん　いろいろ(な)　～から来ました
ぜひ来てください

これは『できる日本語初級』4課にある「話読聞書」というコーナーです。まだ日本語学習を始めたばかりの4課で、これだけの長さで話せるようになることを目指しています(最終的には、書く・

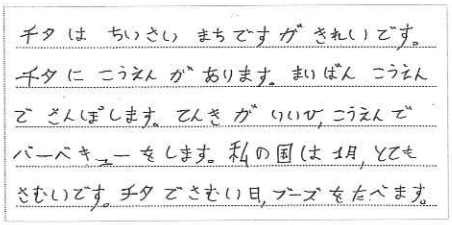
読むといった他技能も視野に入れていますが)。

学びはじめた段階でも、学習者は、知っている語彙(ごい)・文型を駆使して、いろいろなことを言おうと一生懸命です。「自分の国」「自分の好きなこと」「日本でびっくりしたこと」など……。実は、みんな語りたいことがいっぱいあり、日本語で伝え合うことを楽しみたいのです。

「まだ初級スタートしたばかりだから……」「これしか言葉を知らないのに、長くしゃべれるはずがない」などというのは、教師の勝手な思い込み。もっと柔軟に言語活動を捉え、学習者が日本語の海の中でチャレンジしていることを、大切にしたいものです。

次の作文は、2週間前に日本語学習を始めたばかりの留学生ビリクトさんが書いたものです。まず教室で自分の国のことを発表し、クラスメートの話を聞いた後で、4課の「まとめ」として「自分の町」の紹介を書き記しました。

学習者は、こうして、自分自身の頭の中に、日本語のさまざまな「引き出し」を溜(た)め込んでいきます。それがどんどん積み重なって、「対話」のタネが増え、対話力がアップしてきます。


チタは ちいさい まちですが きれいです。
チタに こうえんが あります。まいばん こうえん
で さんぽします。てんきが いいび、こうえんで
バーベキューをします。私の国は 1月、とても
さむいです。チタで さむい日、フーズを たべます。

このように、初級の最初の段階から対話を意識し、その基礎力を付けていきたいものです。そのためには、「自分のことを語る」「自分の周りのことを説明する」「自分の考えを伝える」ことを大切にした日本語教育を、行っていくことが求められるのです。

Column

他者・自己との対話で新たな価値観を!

初級から「対話重視」で授業をやっている留学生たち、上級レベルにもなると、面白い授業展開が見られます。

卒業直前、クラス新聞作りをしているグループで、問題が起こりました。台湾の学生Aさんが書いた記事が、「中国批判」の色が強過ぎる、というのです。

B:相手の国をこんなふうに攻撃する記事は、よくないと思うよ。
A:自分は国でこう習ってきたんだから。
C:国でこういう教育を受けたからって……。書き直したほうがいいよ。
D:日本で共存していくには、どんな表現がいいか、皆で考えてみない?

こんな対話が長く続きました。そして、「絶対に書き直しはしない」と言っていたAさんが、見事に記事を書き換えてきたのです。クラスメートとの対話、Aさんの自己内対話が、新たな価値観を生み出し、新たな記事が生まれたのです。

嶋田和子

イーストウエスト日本語学校副校長。
外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。
現在は、日本語教育業界を牽引するベテランの一人として、学習者への日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。
著書に『目指せ、日本語教師力アップ!――OPIでいきいき授業』(ひつじ書房)、『キムチと味噌汁―韓日、異文化交流のススメ』(教育評論社)、『ワイワイガヤガヤ 教師の目、留学生の声――異文化交流の現場から』(教育評論社)など、多数。
『できる日本語』(アルク)監修

連載ラインナップ

第1回 教科書を考えるって面白い!
第2回 どんな教科書と付き合ってますか?
第3回 タスク先行型授業にチャレンジ!
第4回 「わかる」から「できる」へ
第5回 漢字学習も「できること」重視!
第6回 「プロフィシェンシー」で、教師力アップ! 1
第7回 「プロフィシェンシー」で、教師力アップ! 2
第8回 21世紀の日本語教育は"対話"重視 1
第10回 自律的な学びを支えるモノ
第11回 「学習者が話したくなる」教科書とは?
第12回 対話で新たな日本語教師人生を!